Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-12-05

P.L.バーガーによる社会学の意義論 : 「科学と倫理の問題」という視角から

池田, 直樹

(Citation)
社会学評論,69(1):56-71

(Issue Date)
2018

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006137

［投稿論文］

P. L. バーガーによる社会学の意義論

――「科学と倫理の問題」という視角から――

池田 直樹*

本稿はP. L. バーガーの社会学論，とりわけ社会学のメタレベルにおける意義に関する彼の議論を取り上げ考察する．バーガーが社会学論を展開した1960年代以降のアメリカにおいては，〈社会学と政治〉の関係をめぐって盛んにこの種の社会学論が論じられていた．バーガーももちろんこういった状況を自覚しながらそれに取り組んでいた．だが同時に彼においては〈社会学と信仰〉というもう1つの問題系列も存在した．時系列的にはこちらの系列に〈社会学と政治〉問題が重ねられてくる．

これを踏まえて本稿ではバーガーの社会学論を〈社会学と信仰〉，〈社会学と政治〉という2つの問題系列の交点において捉える．本稿はバーガー自身の言葉を借りてこの問題を，「科学と倫理の問題」として考える．それによって，従来はともすればバーガーが保守化したのかどうかということのみが焦点化されてきた，彼における〈社会学と政治〉問題に異なる光を当てることができる．それはつまり彼の社会学を〈社会学・政治・宗教〉というより包括的な問題連関において捉え直すということである．

こうした問題設定によってわれわれは，バーガーの思想全体への概略的見通しを得ることができるだろう．さらに上記の枠組みにおいて彼を捉え直すことは，意味概念をはじめとする彼の社会学説の再検討のためだけでなく，アメリカ社会学全体の思想的性格を問うための手がかりの1つとなるとも思われる．

キーワード：価値自由，責任倫理，二王国論

1　序――問題設定

周知のように1960年代以降，アメリカ社会学において既存の社会学に対する異議申し立てが噴出してくる．C. W. ミルズの『社会学的想像力』は象徴的な著作であった．そこで問われていたのは社会学説の内容だけではない．社会学の政治的ないし文化的な意義が論点とされたのである．これを〈社会学と政治〉問題と呼んでおこう．高橋徹（1987）が述べる通り，それは60年代のアメリカ社会学における

＊ 神戸大学国際文化学研究科博士後期課程　n.ikeda.kobe@gmail.com

時代の課題というべきものであった．こうした潮流を担ったのは主に新左翼運動にコミットした社会学者たちであり，彼らはラディカル社会学者と呼ばれた．P. L. バーガーも当時アメリカにおいて社会学の意義を問うた代表的な人物の1人である．本稿の目的はバーガーの「メタ科学的な前提」（Berger 1986: 223）を明らかにすることを通して，彼がいかに社会学を意義づけたのかを解明することにある．すなわち従来ほとんど顧慮されてこなかった，バーガー社会学の思想的前提が本稿の主題である．彼自身は『社会学再考』という著作でこれを「科学と倫理の問題」（Berger & Kellner [1981]1982: 166）と表している．それは同書の主題を総括した言い方であり，そこで再考されたものこそ社会学のメタレベルにおける意義だった．本稿ではこうした議論を便宜上「社会学論」と呼んでおく．

本稿の目的には2つの意味がある．1つは2011年の自伝的著作の刊行によって資料も揃いつつある今，バーガー研究が総括の段階に入っていることに関わる．これにより彼の思想全体を論じるための条件が整い始めているのである．本稿はその総括のための第1歩である．2つ目は社会学論という主題自体の重要性にある．バーガーが取り組んだ社会学論は確かに60年代のアメリカ社会学の中心的主題であったけれども，今日においては一見重要性を失ってしまったかに思われるかもしれない．だが決してそうではないのである．そのことは例えば公共社会学論における，何のための，また誰のための社会学か，という問いに示されている．すなわち呼称こそ異なるとはいえ，そこには60年代以降の議論が確かに継承されているのである．バーガーもこの社会学の意義をめぐる議論をアメリカ社会学における重要な論点と見なし，自説を展開した．それゆえ彼による「科学と倫理の問題」としての社会学論を考察することは，60年代以降の議論を解明する始発であるとともに，現代の公共社会学論にまでつながるアメリカ社会学の系譜を照らし出すための一助ともなるだろう[1)]．

ではバーガー社会学の思想的前提はいかなるものであったのか．従来の研究はいずれも〈社会学と政治〉という2項からなる観点からバーガーを捉えている．彼がアメリカにおける代表的な新保守主義者の1人とされているためであろう．しかしこの視角からの解釈は彼の思想的前提への問いを開くという功績はあったものの，1種のアポリアに陥っていると思われる．すなわちそこでは2つの解釈が対立したまま調停されずにいるのである．新保守主義者というバーガーの政治的立場は政治思想史研究においては今日自明視されているため（Dorrien 1993; 清水 2011），社会学と政治の関係はほとんど問われない．解釈上の対立が生じているのは社会学説研究においてである．一方は，バーガーは60年代においてはラディカリズムに親和的であったけれども70年代以降保守化したと述べ（飯田 1990; 山嵜 1991），他方は，バーガー社会学には確かにラディカリズムへと通ずる要素はあれど同時に保守的な要素もあるがゆえに，その政治的立場は転向ではなく彼の社会学の必然的帰結だと主張している（Abercrombie 1986; O'Leary 1986）．バーガー自身は後者の立場をとっているため，彼の社会学がラディカリズムに親和的なものと解されるな

らば，それは「深い誤解」（Berger 1986: 223）であると述べている．

とはいえ誤解が生じたのだとすれば相応の理由があったはずである．バーガーが保守化したのか，もともと保守的であったのかというアポリアを脱して，それらをより包括的な地平において理解するにはこの理由を明らかにせねばならない．バーガー社会学にラディカルな面と保守的な面が並存していたからだというだけでは，まだ解釈として不十分である．なぜそうした矛盾する要素が共存しえたのかということこそが明らかにされねばならないのである．これを解明するためには視点の付加が必要となる．すなわち社会学と政治に加えて第3の項目が必要なのである．それはわれわれの見るところ信仰という契機である．なぜなら以下で見るように，キリスト者としての信仰が彼の思想において極めて重要な位置を占めているからである．つまり彼の社会学論を〈社会学と政治〉，〈社会学と信仰〉という2つの問題系列の交点において捉え直すのである．そこで本稿では〈社会学と政治〉，〈社会学と信仰〉を包括的に表現する視座として〈社会学・政治・宗教〉という3項からなる視座を設定する．これによってバーガーの思想全体への概略的見通しが得られるだろう．それは彼を統一的に把握するための手がかりとなる．またこのようにバーガー解釈をめぐる対立により深いレベルにおいて対処することは，末尾で示唆する通り，バーガー個人の理解にとってだけでなく，同じくこの3項のダイナミズムの中にあったと思われるアメリカ社会学の思想性の解明にとっても重要である．

論述の具体的な手順は以下の通りである．第**2**節では60年代における彼の社会学論を，第**3**節では70年代以降の社会学論を論じる．時系列的に見るならば彼の社会学論はもともと〈社会学と信仰〉という主題の下に考えられており，そこに70年代以降〈社会学と政治〉という問題設定が重ねられてくるからである．さらに第**4**節で70年代以降の社会学論と彼の信仰との関係をあらためて問う．

2　価値自由論

60年代のバーガーの社会学論を考察する際に対象とすべきテクストは，1961年の『不安定な情景』と1963年の『社会学への招待』である．この時期の彼の思索の原型はすでにこれらにおいて出揃っている．60年代のバーガーの議論にラディカリズムへと通ずる要素を見出そうとする論者が論拠とするのは，『社会学への招待』等の著作における，時に彼の思考の特色だとされる「社会学的相対主義」（sociological relativism）である（上野 1985; 山嵜 1991）[2)]．社会とは所与の絶対的なものではなく人間によって構成されたものであるがゆえに，それをつくりかえることも可能だとする主張である．バーガーをラディカリストとは見なさない論者ですら，これが彼の社会学の立場を典型的に表すとしている（Carveth 1977）．しかしそれは必ずしもバーガーに固有の立場というわけではない．

内容的に類似した議論は当然あるものの，管見の範囲において，そもそもバーガー自身は一度も「社会学的相対主義」という語を用いていない．これはアメリカ社

会学においてはC. D. ボルトン（Bolton 1957）が，当時社会学に生まれつつあった新たな潮流を指すために用いた語である．時代的制約のゆえにボルトンはそこではバーガーの名を挙げていない．しかしボルトンがこの潮流の眼目を「意味システムを創出するという，社会的に受け継がれた能力」（Bolton 1957: 22）に見ている点で，バーガーもそこに含まれるといえる．両者はともに社会という意味的世界の構成を説くからである．だとすれば重要なのはバーガーがいかなる立場からそれを述べているのかということである．

バーガーにおける1つの前提は「聖なる天蓋」の崩壊，いわゆる客観的意味の崩壊という事態である．バーガーは社会を意味的世界として捉える．しかしそれは神や理性，自然の客観的意味を反映したものではなく，人間によって構成されたものである．「リアリティは社会的に構成される」（Berger 1963: 118）というのである．こうした主張は今日ではあまりにも自明なものと見えるだろう．けれども実はそこにはさらなる含意がある．それは彼の処女作である『不安定な情景』から明らかとなる[3)]．

そこではバーガーの社会観のいわば神学的な前提が示されている．すなわち社会が人間の所産であるというのは何よりもまず神と人間との対比の中で考えられているのである．「神は社会を創造しなかった．社会は完全に人間の発明したものである」（Berger 1961: 194）．社会が人間の所産であるのはそれが神の所産ではないからであり，だからこそ彼の社会学は「人間主義的社会学」（Berger 1963: 164）なのである．

さらに注目すべきは，『不安定な情景』という著作が全体として掲げていた問いである．これが「科学的な著作ではない」（Berger 1961: 9）ことを断った上で，彼が同著を通じて問うているのは「真に現代的な人間はキリスト者でありうるか」（Berger 1961: 8）ということであった．つまり現代におけるキリスト教信仰の可能性が問われているのである．ここで現代という状況を映し出すとされるのが社会学である．

この問いが『不安定な情景』という処女作において問われたということは重要である．なぜならそれはバーガーの思想全体を貫く関心の出発点を示していると考えられるからである．事実彼の神学的な関心は決して処女作だけに限られたものではない．バーガーが社会学を論じながら，並行してその後も神学的著作を著し続けたという事実がそれを証している．つまり彼の関心は社会学だけにあったのではなく，処女作にも表されているように，むしろ〈社会学と信仰〉という問題こそがより根本的な関心だったのである．「良くも悪くも私の自己認識は社会学者であるということには尽きない．私は自分がキリスト者でもあることを認めているからだ」（Berger［1969］1990: xvi）．この初発の問題関心は形を変えながらその後も抱かれ続けている．それゆえわれわれは上記の事実を踏まえて，彼における社会学というものの意義づけの仕方を捉え直さねばならない．すなわち社会学と信仰の関係が問題なのである．では，それはどういった関係であったのだろうか．

まさしくこの問題をめぐって，バーガーは『社会学への招待』で一見 M. ウェーバーに酷似した解答を与えている．すなわち経験科学としての「社会学は『価値自由』である」（Berger 1963: 5）というのである．バーガーはここで社会的世界の意味の理解に価値自由という原理を適用することを主張する．これは先に述べた「聖なる天蓋」の崩壊という事態の方法論的帰結である．つまりバーガーは現実世界を宗教的，形而上学的な客観的意味が後景に退いたものとして捉えているため，現実はもはやこうした客観的意味の模写，反映ではなくなる．それゆえに社会的現実が現実そのものとして，現実それ自体において理解の対象となる．こうした世界把握の仕方はそれ自体近代的なものであり，それゆえに社会学は「特殊近代的な意識形態」（Berger 1963: 25）を表しているとされる．とはいえここに重要な変化が生ずる．「聖なる天蓋」の存在を前提としえない以上，現実把握の構成契機は社会学者の主観の側に移るのである．価値自由の原理が適用されるのはまさにここである．社会学者が社会学者として仕えるべき価値は「科学的廉直さ」のみであり，「彼の確信，感情，偏見などはその仕事から取り除くべきバイアス」（Berger 1963: 5）だとされる．それは社会学者の側に要請される「知的修練」（Berger 1963: 5）なのである．つまり価値自由原理を適用しなければその現実理解は社会学者の主観的価値の反映にほかならなくなってしまうからこそ，バーガーは社会学者の側に価値自由という主体的な態度を要請するのである．

60 年代におけるバーガーの社会学論の核心は以上の通り，価値自由論を中心的主題としている．しかし『不安定な情景』やそこから推察される彼の思索関心を踏まえるならば，それが単に社会学方法論であるだけではなかったということがわかる．つまりそれは社会学と自らの信仰とをいかに調停するかという，彼自身の内面の問題への答えでもあったと解しうるのである．その解答は，社会学上の議論と信仰に根ざした主張を方法的に峻別するという態度だった．バーガーにとって社会学は自らの信仰内容やその可能性を問う場ではない．それらの問いは神学の課題だとされるのである[4)]．

しかしバーガーのこの社会学論は同時代的文脈においてはほとんど理解されなかった．それどころか彼の社会学は「ネオ・マルクス主義や対抗文化的言説の特殊な混合物の中に組み込まれて」（Berger 2011: 92）いきさえした．年代的には少し遅れるものの日本においても，例えばバーガーの『リアリティの社会的構成』を邦訳した山口節郎（1982）などがいる．山口は批判を加えながらもバーガー社会学を，物象化批判を担う解放の社会学の方向性を示すものとして肯定的に紹介していた．当時のこうした受容の原因の 1 つが，社会をつくりかえることができるとする彼の社会学的相対主義にあったと考えることは的外れではないだろう．社会の変革を語るラディカリズムと通底するものがそこには確かにあるからである[5)]．だがバーガー自身によればそれは「誤解」であった．さらに 60 年代においてはバーガーの受容だけでなく，社会学全体がラディカリズムの台頭に飲み込まれていく．バーガーの 70 年代以降の社会学論は彼自身への誤解に対する反論であるとともに，ラディ

カリズムへの批判でもあった．これらを検討することで彼の価値自由論のさらなる展開が明らかになる．

3　責任倫理論

70 年代以降のバーガーの社会学論を検討する際に対象とすべきテクストは，1974 年の『犠牲のピラミッド』と 1981 年の H. ケルナーとの共著『社会学再考』である．政治倫理に関する著作である『犠牲のピラミッド』にここで言及する理由は後述する．

バーガーの社会学論の核は引き続き価値自由な社会学の主張である．しかし 70 年代以降の社会学論においては，新たに〈社会学と政治〉という問題設定が加えられる．これはラディカル社会学者の台頭を受けての応答である．ラディカル社会学者は総じて価値自由原理を欺瞞ないし保守的イデオロギーだとして非難し，社会学の政治的コミットメントを唱導していた．彼らに対して価値自由な社会学を擁護するには，もはや価値自由原理の主張だけでは不十分となる．つまりそもそも社会学と政治は結びつくのか，結びつくとすればいかなる形においてか，ということを明らかにせねばならなかったのである．それはまたバーガーにあってはラディカル社会学への批判を意味していた．

バーガーは「1960 年代において……『心情倫理』がアメリカの政治の中心となった」（Berger［1974］1976: 249）として，ラディカリズムの台頭を心情倫理的政治の台頭と見なした．そしてラディカリズムをこのように捉えた上で，冒頭で紹介したようにバーガーは〈社会学と政治〉問題を「科学と倫理の問題」（Berger & Kellner［1981］1982: 166）として定式化する．バーガーのこの視点は重要である．というのもラディカル社会学者が問題としていたのは社会学のあり方だけに限られなかったからである．彼らにおいては社会や個人のあり方といった政治的，倫理的な関心が心情倫理という形で社会学論と結びついていたのである（高橋 1987）．ラディカル社会学者の間で定型となっていたウェーバー批判は，ウェーバーが価値自由論によって科学と倫理，社会学と政治を断絶させてしまったというものだった（Szymanski 1971）．彼らもまたバーガーとは反対の立場をとりつつも「科学と倫理」のあり方を問うていたのである．それゆえバーガーの「科学と倫理の問題」は一方では〈社会学と政治〉問題である．しかしすでに見た通り「科学と倫理の問題」としての社会学論は，彼にあっては他方で〈経験的現実と信仰〉という問題でもあった．それゆえバーガーにおける「科学と倫理の問題」の内実は〈社会学・政治・宗教〉という問題連関だったのである．本稿の主題であるバーガーの社会学論への問いとは，まさにこの連関の絡まり方，換言すればこの連関における「バーガー的な」結節と分節の仕方への問いである[6)]．われわれはこれこそを明らかにせねばならない．

ではバーガーは具体的にいかなる議論を展開しているのか．まずは〈社会学と政

治〉の側面から見ていこう．社会学的相対主義の立場からバーガーは，ラディカル社会学と同様，社会をつくりかえることは可能だという．社会はその都度の今と別様でありうる．しかしバーガーはラディカル社会学とは異なり，この命題をそのまま社会変革を要請する主張に結びつけはしない．それどころかその命題は科学としての社会学の自己理解と緊張関係――「『である』と『であるべき』，理解と希望，科学的分析と行為との緊張」（Berger & Kellner［1981］1982: 20）――にあるという．ここでもバーガーは一見ウェーバーに酷似した主張をする．すなわち「である」と「であるべき」という命題を緊張関係において捉えた上で，科学としての社会学が関わるのは前者だけだとするのである．社会が変容しうるという命題と変革をすべきだという主張とは別物である．バーガーは科学と倫理，ここでいう社会学と政治の一体性をひとまず否定し，それらを区別する．「社会学は道徳的指針を与えることはできない」（Berger & Kellner［1981］1982: 77）．

しかしながらこれはラディカル社会学者のいうような両者の完全な断絶を意味しているのではない．ここでバーガーはまたもやウェーバーの用語を援用し，「逆説的に社会学は……ウェーバーが責任倫理と呼んだものと興味深い関係を持っている」（Berger & Kellner［1981］1982: 77）というのである．この命題はバーガーによる心情倫理批判を踏まえるとき初めて理解できる．70 年代以降のバーガーの社会学論が『犠牲のピラミッド』の，心情倫理を批判し責任倫理を要請している結論部を前提にして解釈されねばならないのはそのためである．バーガーはそこで，価値自由と責任倫理を接合しようとしたウェーバーの立場に自らの範を求めているように見える．

> ウェーバーは社会科学者の「価値自由性」や政治的行為者の道徳的責任についての彼の立場を述べた．この 2 種の立場はそれが重ねられたとき最もよくその意味がわかる．……ウェーバーの偉大さはこの二重の情熱にこそあった．（Berger［1974］1976: 248）

バーガーが責任倫理を主張する意図は，このように価値自由な社会学の擁護にあった．というのも，社会学を心情倫理的行為者ではなく責任倫理的行為者に結びつけることによってこそ，社会学の価値自由性が保証されるからである．「道徳的絶対主義者は結果というものを閑却するか，少なくとも強調しない」（Berger & Kellner［1981］1982: 77）．反対に責任倫理的行為者は「起こりうる結果と代償の道徳的計算」（Berger & Kellner［1981］1982: 78）を必要とする．そして蓋然的な結果と代償の計算は，現実を，何らかの絶対的な倫理的公準の図式においてではなく現実それ自体において捉えること，要するに価値自由な社会学への専心によってこそ与えられるのである．

こうして 70 年代以降のバーガーの社会学論の骨子が明らかになる．それは 60 年代の議論を前提とした，価値自由な社会学と責任倫理の相互補完という主張である．

価値自由な社会学が責任倫理に寄与し，責任倫理的行為者が価値自由な社会学を必要とする．このように見るならば，バーガーの70年代以降の議論はラディカリズム批判という点では確かに保守化したと解されうる面はあるものの，単なる保守化という事態に尽きるものではない．むしろそれは60年代の価値自由論の，同時代的文脈におけるさらなる発展だといえるのである．

とはいえここで1つの問いが生じる．60年代から70年代にかけて社会学の価値自由性という命題は徹底的にその神話性が暴露されつつあった．価値自由批判は左派からのイデオロギー批判だけではない．代表的なものを挙げればR. W. フリードリックスの科学方法論（Friedrichs［1970］1972）や，さらにはR. A. ニスベットのような保守派の社会学者の社会学論（Nisbet［1966］1967）でさえもが，社会学は決してそれ自体として価値自由ではないことを明らかにしようとしていたのである．70年代以降のバーガーの社会学論はこれらを受けて展開されている．それゆえ彼は価値自由な社会学を「成し遂げるのはしばしば困難である」（Berger & Kellner［1981］1982: 56）ことを十分に認めながらも，その達成に向けて努力する態度を再度主張する．つまり彼のいう価値自由な社会学は「禁欲的理想」，すなわち「自らの好悪，希望，恐れとは無関係に明確に理解しようとする情熱」（Berger & Kellner［1981］1982: 56）という主体的態度なのである．

だとすればそれを要請するものは何なのか．これこそが問題である．われわれはこの問いに，彼のウェーバー理解の屈折ないしバイアスという視角から答えることができるだろう．バーガーは自身の議論をウェーバーの用語を通して語っているからである．それは一見ウェーバーの議論と酷似している．しかし実は両者の間には重大な相違があるのである．そしてまさにこの点こそがバーガー理解の鍵なのである[7]．

4　二王国論

ここでわれわれはバーガーの，特に70年代以降の社会学論が〈社会学・政治・宗教〉という問題連関をなしていたという点に立ち戻ろう．信仰という論点を加味することで，彼がウェーバーの用語を援用することの意味が明らかになると思われる．なぜなら彼自身も「私のメタ科学的な前提は……宗教的ルーツを持っている」（Berger 1986: 223）と述べているからである．では彼における〈社会学と政治〉問題と信仰とはいかなる絡み方をしているのだろうか．

バーガーは神学的著作において彼自身の信仰に基づいて責任倫理を要請している．だとすれば，その責任倫理論をより詳しく吟味する必要があるだろう．宗教的立場についていえば，バーガーは自らをルター派だと述べている．バーガーは，あくまで彼が解する限りにおいてのルター派の中心的教義とされる二王国論に基づいて責任倫理を要請しているのである．換言すれば彼の信仰は二王国論の立場に立っており，心情倫理批判はこの立場からなされているのである[8]．バーガーによれば責任

倫理は何よりもまず神の国と現世，福音と律法との峻別に基づいている．以下の引用文は心情倫理への批判と責任倫理の要請を典型的に示している．

> 二王国論は政治的行為……を通じて救済や究極的な意味を約束するような計画すべてに対する防御壁となる．……律法の領域には，絶対的，宗教的ないし準宗教的な帰依の精神でアプローチしてはならない．そうではなく，そこには賢明な理性の精神でアプローチしなければならないのである．（Berger 2010: 162）

それではバーガーの責任倫理論の立論はどのようなものだろうか．その論理的構成は４つの契機を含んでいる．第１の契機は彼の信仰である．これが議論の根幹となる．第２の契機は，現世がまだ神の国ではないということである．彼の信仰は二王国論の立場に立つ信仰であり，二王国論は「恩寵の世界はまだ来ていない」（Berger［1992］1993: 210）ことを告げる．「福音はいまだ来たらざる（とはいえキリストの復活において始まっている）神の国を告げ知らせるのである」（Berger 2010: 162）．ここから第３の，いまだ神の国ではない現実を現実そのものとして捉えるという契機が生ずる．これがバーガーのいう価値自由な社会学である．そして第４の契機が隣人愛であり，バーガーはこの隣人愛こそが責任倫理の本質であるというのである．どういうことか．この点についてはもう少し詳しい説明が必要だろう．

バーガーによれば「二王国論は信仰義認論に根ざしている」（Berger［1992］1993: 210）．信仰義認論とは，救済をもたらしうるのはわれわれの行為ではなくただ信仰のみ，恩寵のみであるとする教説である．神の国はまだ来ていないだけであって，いつか訪れるものだとされる．信仰義認論と二王国論が説くのは，恩寵をもたらす神の国が現世における何らかの行為によって実現されることはなく，それゆえまたわれわれの手によって神の国をもたらそうとしてはならないということである．こうして二王国論は一般的には政治的秩序（現世，国家）と霊的秩序（神の国，教会）との分離峻別を説いたものだとされる．それゆえにこの教義はドイツにおける非常に強固な保守主義の源泉の１つとなったとされ，また第二次世界大戦後はドイツのキリスト教教会がナチズムを止められなかったことの一因として断罪されてきた．けれどもバーガーはこのような二王国論の解釈には与しない．というのも神の国の訪れを信じつつ待つ中にも，キリスト者として現世において果たすべき使命が存在すると彼は考えるからである．バーガーの考えるところによると，キリスト者はただ単に神の国を待つだけではないのである．

ではその使命とは何か．それこそがキリストに対しては信仰を通して，隣人に対しては愛を通して生活するという使命である．バーガーは「現世においてわれわれのなしうる最善のことは正義の国の探求である」（Berger［1992］1993: 210）と述べ，正義とは隣人愛の実践であるという．なぜなら現世における正義の基準は常に

「われわれの行為が……他者のために何をなすか」(Berger [1992]1993: 211) ということだからである．このような隣人愛の実践がバーガーにおいて責任倫理の本質となるのである．彼が「起こりうる結果と代償の道徳的計算」と述べていた「道徳的」とはまさにこの謂である．

> ウェーバーの2つの倫理的可能性のうちどちらが信頼できるものであろうか．明らかに責任倫理であるに違いない．……キリスト教信仰はわれわれ自身の純潔性にではなく，隣人に対する最優先の関心を命じている．(Berger [1992] 1993: 208)

それゆえにバーガーのいう責任倫理の責任とは，ウェーバー的な意味での自らの行為が他者に及ぼす結果に対する責任であると同時に，さらにそれをこえて，そうした形で隣人愛を実践することへの神に対する責任でもある．

> 聖書の宗教は人間を責任ある者＝応答可能な者（responsible）として定義している．……人間は神に語りかけられ，それに応答することを求められている存在であるがゆえにまた，倫理的に責任を持つ者なのである．(Berger [1992]1993: 100)

こうしてバーガーの立場の意味が明らかになる．一見ウェーバーをそのまま踏襲したかに思えるバーガーの一連の議論は，実にこのような信仰に根ざした態度に基づいているのである．責任倫理についてバーガーは次のような驚くべき言明すらしている．「ここでウェーバーは世俗化したルター派の倫理を提示しているともいえよう」(Berger & Zijderveld 2009: 138)，あるいは「ウェーバーのいう2つの倫理はルター派の二王国論と非常に強い類縁性を示している」(Berger 2010: 163)，と．ウェーバーをルター派的に読むというのは，ウェーバー研究としては極めて異端的な主張かもしれない．とはいえこの言明はウェーバー論としての妥当性が問われるべきものではなく，むしろバーガーによるウェーバー解釈の思想的なバイアスを示すものと解されるべきである．『職業としての政治』末尾におけるウェーバーによる周知のルターの言葉の引照を，バーガーは故意に文字通りに受け取ろうとしたのだともいえる．ウェーバーとバーガーの違いもそこにある．つまりウェーバーが現実のみを冷厳に直視しようとしたリアリストだったとすれば，バーガーは上述のキリスト者の立場から現実に向き合おうとしたキリスト教的リアリストだったのだ．

こうした両者の相違はバーガーの『遥かなる栄光』という神学的著作のエピローグにも現れている．彼はそこで『職業としての学問』に言及しながら，その末尾に引かれた旧約聖書におけるものみの話に触れている．ウェーバーにとってこの話はまさに朝が来ないこと，すなわち現代において神の国が決して来ないことを象徴するものであった．それゆえに彼にあってはいかなる擬似的救済手段も拒否され，各

人は自らの行為の結果に対して責任を持たねばならないとされる．バーガーも朝は〈今・ここ〉には訪れないという．だが，バーガーは朝が訪れる可能性を決して否定しない．いやそれどころか，この可能性を信じて隣人愛を実践することを説くのである．これはキリスト者であるバーガーの決して譲れない点である．「われわれの小著は希望の調子で終えられる．ものみのもとへと引き返し，くり返し問いかけるのだ．なぜなら朝は来るだろうからである」（Berger［1992］1993: 218）．

以上が信仰者としてのバーガーの立場である．こうして価値自由と責任倫理という2つの原理の相互補完を核心とする70年代以降のバーガーの社会学論は，彼の信仰に深く根ざしていたことがわかる．心情倫理的政治への批判の核となる責任倫理の要請は無神論的立場にではなく，神の国の訪れを待つキリスト者の使命としての隣人愛に基づいていたのである．価値自由な社会学の意義は責任倫理への貢献にこそあった．社会福音運動に鼓舞された黎明期のアメリカ社会学において根本的な動機であった隣人愛という使命を，バーガーは彼なりのウェーバー理解と結合しようとしたともいえるかもしれない．社会学は彼にあっては，恩寵のいまだ来たらざる現世におけるキリスト者の使命，すなわち隣人愛という形での賢明な理性の行使に寄与するものなのである．まさにこれがバーガーの，「合理性という観点からの結果の考量が社会学的分析の核心にある」（Berger & Kellner［1981］1982: 78）という一見ウェーバー的な命題の意味であった[9]．

> 私の倫理体系はキリスト教的人間理解，不可避的に保守的な歴史観，徹底的に暴露的な社会学理論のパースペクティヴからなる，かなり複雑な相関関係を意味しているのである．（Berger［1974］1976: 252）

こうしてわれわれは冒頭の，バーガー社会学におけるラディカルな面と保守的な面の共存の理由という問いに対して答えを与えることができる．彼の社会学におけるラディカルな面とは，社会学的相対主義の主張，すなわち人間主義的社会学の立場に立った社会の変容可能性の示唆である．機能主義やシステム論はすでに1950年代においてアメリカ社会学の支配的パラダイムとなっていた．それに対して異議申し立てが沸き起こるという状況の中で，60年代のバーガーの議論がラディカリズムとある種の親和性を持っていたことは事実であろう．しかしバーガーにおいてはこれがそのまま社会変革の唱導に結びつけられはしなかった．この点が彼の社会学における保守的な面を表している．その保守性は心情倫理を批判し責任倫理に寄与する価値自由な社会学の理念を固守するということにあり，そこには，とりわけ革命という擬似的救済を拒否する，二王国論に立つ彼の信仰が深く絡んでいた．現世における社会はそれが神の国ではないために絶えず人間によってつくりかえられうる．しかし人間によるいかなる社会の構成も救済を約束することはできないのである．保守とラディカルの両側面がバーガーにおいて共存しうるのは，彼が神学的立場から社会学と政治を，彼なりの仕方で，価値自由と責任倫理の相互補完関係と

して架橋しようとしていたからであった．したがって彼におけるラディカルな面と保守的な面の共存は究極的には彼の宗教的立場に根ざしていたのである．

5　結――展望

本稿はバーガーの社会学論における，彼による社会学の意義づけの仕方，政治への関わり方，信仰者としての立場を論じてきた．最後に今後の筆者の研究への展望を問題提起の形で述べておく．重要なのは彼における〈社会学・政治・宗教〉の連関である．神学的著作の存在はこれまでのバーガー研究においてなるほど認められていたとはいえ，社会学との関係は特に日本ではほとんど論じられることがなかった．しかしながら本稿で明らかにしたように，彼において社会学，政治，宗教はそれぞれ別個の問題領域を形成しながらも密接な関係を持っている．この事実を踏まえることで新たに次のような課題が生じてくる．まず第1に彼の社会学といわれるものがあらためて検討されねばならない．バーガーの社会学は一般に意味の社会学ないし日常の社会学として知られており，これは A. シュッツの思想の社会学的な継承だとされている．しかし彼の神学的前提を踏まえるならば，こうした理解も再検討されるべき余地があるだろう．バーガーの社会学は神の国の訪れを待ちながら現実を現実そのものとして捉えようとするものであった．その際の対象となったのが人々の生きる日常という意味世界である．それゆえ〈日常〉〈自己〉〈意味〉といった彼の社会学における具体的論題が，社会学と神学との接点でもあったものとして捉え直されねばならないのである[10)]．

また「科学と倫理」というバーガー論の視角，すなわち〈社会学・政治・宗教〉という視角はアメリカ社会学全体の研究にもある程度適用しうると思われる．社会福音運動による社会改革がその源泉の1つであったように，アメリカ社会学は当初から政治や宗教といったものと不可分の関係にあった（Vidich & Lyman 1985）．そして冒頭に述べたように，この系譜は現代の公共社会学論にもある程度受け継がれているといえる．つまりこの関係はアメリカ社会学において始終顕在化していたわけではないものの，現代に至るまで重要な論点であったし，今もそうであり続けているのである．したがってわれわれは，このバーガー研究をアメリカ社会学全体の研究へと拡大しうるように思われる．この点を示唆することで本稿の結びに代えておきたい．

［注］

1）　以下本稿では60年代に登場した上記の左派の潮流をラディカル社会学ないしラディカリズムと呼んでおく．ラディカル社会学とその思想性に関して，詳しくは高橋（1987）を参照．なぜこの呼び方が廃れ公共社会学なるものが登場したのかということは別稿を要する問題である．公共社会学に関しては M. ブラウォイ（Burawoy 2005）を参照．また社会科学における学問とその思想性への問いは政治学などでは盛んに論じられている．例えば佐々木毅（1993）を参照．

社会学においても例えば高城和義（1992）の T. パーソンズ研究を参照.

2） バーガー社会学の立場は「構成主義（構築主義）」とも呼ばれる．社会がもはや絶対的なものでないならば，必然的にその相対性と構成性は相関的なものとなる．原語は「constructionism」と「constructivism」の２つがあり，これらを，前者こそバーガーの立場であるとして明確に区別し，後者を退ける論者もいる（Gergen 1985）．実際イデオロギー的含意を嫌って，バーガーは「constructivism」という語を明確に拒否している．しかし彼自身は「constructivism」の方を Th. ルックマンとの共著のタイトルと関連するものと見なしている（Berger 2011: 93-5）．彼によるそれらの語の区別はかなり曖昧なものであり，また「constructionism」が彼の立場の名称として採用されているわけでもない．バーガーの社会学的立場の呼称をめぐっては別稿でさらなる検討が必要であるものの，本稿ではひとまず「社会学的相対主義」と表しておく．

3） 著作の刊行順では『不安定な情景』は２番目の著作となっている．しかしそれは出版事情によって２番目となってしまっただけで，学位論文以外のまとまった分量の作品としてはこれが処女作である（Berger 2011: 72-4）．

4） 〈社会学と信仰〉という観点からのバーガー解釈の妥当性は，バーガーの思想を社会学者とキリスト者の「二重市民的アプローチ」（Ahern 1999）とする解釈があることによっても補強される．A. J. アハーンは「バーガーを適切に解釈するには２つの段階を経ねばならない」として，「第１にバーガーの宗教理論を吟味し」た上で「第２に宗教に対する社会学的視点と神学的視点の詳細な検討」を提起している（Ahern 1999: 2-3）．しかしアハーンの解釈はあくまでも宗教研究に資する限りでバーガーを論じるという制限が設けられているため，バーガーの思想全体への視点が欠けているという点で限界がある．

5） 実際，一般に現象学的社会学を主観内在的で抽象的な理論として批判したラディカル社会学の間でも，留保つきであるとはいえ，ある程度バーガーの議論を好意的に受け取る論者は存在した（Lichtman 1971）．

6） 冒頭にも述べたように，社会学の意義づけをめぐる議論は 60 年代のアメリカ社会学における最も重要な主題であった．本稿で取り上げるバーガーの議論はこの問題に対する１つの解答である．実際この問題の捉え方はさまざまであり，その解答も決して一様ではなかった．本稿の「『バーガー的な』結節と分節」という言い方はそのことを踏まえている．

7） ここで，なぜ重大な相違があるにもかかわらずバーガーがウェーバーの用語を用いるのかという疑問が生ずるかもしれない．実はこれは本稿の射程をはるかに越える問いである．それはアメリカ社会学におけるウェーバー受容の文脈とその意味という，大変に重要だが厄介でもある学説史的問題に関わっている．ここではそうした問題が伏在していることのみを指摘しておく．

8） 以下本稿では，あくまでもその主題であるバーガーの社会学論に関係のある限りで彼の神学的議論を取り上げる．それゆえ本稿で展開される議論はバーガーの思想の解析であって，彼の神学的主張の妥当性をそのまま肯定するものではない．また彼自身が次のように述べていることも記しておく．「私がルター派の考えの多くを本来の意味からは逸れる仕方で用いているということを証明するのに，神学者は何の困難も感じないだろう」（Berger 2010: 152）．

9） 神の国は〈今・ここ〉には決して来ないがいつの日か必ず訪れるため，今はそれを信じて隣人愛を実践しながら待つべきだとする主張は，キリスト者にとってもそうでない人にとっても納得しがたいと感じられるかもしれない．それは本当に訪れるのかという疑念がともすれば信仰の可能性そのものを脅かしかねないからである．これに関わる信仰の可能性への問いはバー

ガーの神学的思索の主題でもあった（Berger［1969］1990, ［1992］1993）.

10） バーガー社会学の再検討に関していえば，近年ではM. プファデンハウアー（Pfadenhauer 2010＝2013）が，バーガーの知識社会学を主な解釈枠組みとしながら社会学以外の議論を含めて論じている．しかしプファデンハウアー自身も認めている（Pfadenhauer 2010＝2013: 9）通り，この著作はバーガーの宗教的立場からの社会学への影響をほとんど考慮に入れていない．これと対照的なのが例えばR. C. フラー（Fuller 1987）である．フラーは『天使のうわさ』という著作以降のバーガーを，人間の経験における宗教的次元を認知すべく社会科学の経験論を拡張しようとした「宗教思想家」（1987: 509）として提示する．しかし筆者はどちらの解釈方向からも距離をとりたいと考えている．その理由は本文で述べたように，社会学か宗教思想か，といった2項対立においてではなく，〈社会学・政治・宗教〉という3項の連関の中でバーガー社会学を検討する必要があるからである．

［文献］

＊本文中の引用に関してはすべて筆者が原典から直接訳出した．その中には本論の文脈に合うように既存の邦訳と表現を変えたものもある．

Abercrombie, N., 1986, “Knowledge, Order, and Human Autonomy,” J. D. Hunter & S. C. Ainlay eds., *Making Sense of Modern Times: Peter L. Berger and the Vision of Interpretive Sociology,* London; New York: Routledge & Kegan Paul, 11–30.

Ahern, A. J., 1999, *Berger's Dual Citizenship Approach to Religion,* Bern: Peter Lang Publishing.

Berger, P. L., 1961, *The Precarious Vision: A Sociologist Looks at Social Fictions and Christian Faith,* New York: Doubleday.

———, 1963, *Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective,* New York: Anchor Books.（＝1979, 水野節夫・村山研一訳『社会学への招待』思索社.）

———, ［1969］1990, *A Rumor of Angels: Modern Society and the Rediscovery of the Supernatural,* New York: Anchor Books.

———, ［1974］1976, *Pyramids of Sacrifice: Political Ethics and Social Change,* New York: Anchor Books.（＝1976, 加茂雄三・山田睦男・乗浩子訳『犠牲のピラミッド――第三世界の現状が問いかけるもの』紀伊國屋書店.）

———, 1986, “Epilogue,” J. D. Hunter & S. C. Ainlay eds., *Making Sense of Modern Times: Peter L. Berger and the Vision of Interpretive Sociology,* London; New York: Routledge & Kegan Paul, 221–35.

———, ［1992］1993, *A Far Glory: The Quest for Faith in an Age of Credulity,* New York: Anchor Books.

———, 2010, “A Lutheran Approach,” P. L. Berger ed., *Between Relativism and Fundamentalism: Religious Resources for a Middle Position,* Grand Rapids: William B. Eerdmans Publishing, 152–63.

———, 2011, *Adventures of an Accidental Sociologist: How to Explain the World without Becoming a Bore,* New York: Prometheus Books.（＝2015, 森下伸也訳『退屈させずに世界を説明する方法――バーガー社会学自伝』新曜社.）

Berger, P. L. & H. Kellner, ［1981］1982, *Sociology Reinterpreted: An Essay on Method and Vocation,* Harmondsworth: Penguin Books.（＝1987, 森下伸也訳『社会学再考――方法としての解釈』新曜社.）

Berger, P. L. & A. Zijderveld, 2009, *In Praise of Doubt: How to Have Convictions without Becoming a Fanatic,* New York: HarperOne.（＝2012, 森下伸也訳『懐疑を讃えて――節度の政治学のために』新曜社.）

Bolton, C. D., 1957, "Sociological Relativism and the New Freedom," *Ethics*, 68(1): 11–27.

Burawoy, M., 2005, "2004 ASA Presidential Address: For Public Sociology," *American Sociological Review*, 70(1): 4–28.

Carveth, D. L., 1977, "The Disembodied Dialectic: A Psychoanalytic Critique of Sociological Relativism," *Theory and Society*, 4(1): 73–102.

Dorrien, G., 1993, *The Neoconservative Mind: Politics, Culture, and the War of Ideology,* Philadelphia: Temple University Press.

Friedrichs, R. W., [1970]1972, *A Sociology of Sociology*, New York: Free Press.

Fuller, R. C., 1987, "Religion and Empiricism in the Works of Peter Berger," *Zygon*, 22(4): 497–510.

Gergen, K. J., 1985, "The Social Constructionist Movement in Modern Psychology," *American Psychologist*, 40(3): 266–75.

飯田剛史, 1990,「バーガーとルックマンの社会学」中久郎編『現代社会学の諸理論』世界思想社, 96–112.

Lichtman, R., 1971, "Social Reality and Consciousness," J. D. Colfax & J. L. Roach eds., *Radical Sociology*, New York; London: Basic Books, 149–70.

Nisbet, R. A., [1966]1967, *The Sociological Tradition*, London: Heinemann.（＝1975, 中久郎監訳『社会学的発想の系譜』アカデミア出版会.）

O'Leary, J. P., 1986, "The Place of Politics," J. D. Hunter & S. C. Ainlay eds., *Making Sense of Modern Times: Peter L. Berger and the Vision of Interpretive Sociology,* London; New York: Routledge & Kegan Paul, 179–96.

Pfadenhauer, M., 2010, *Peter L. Berger*, Konstanz: UVK.（＝2013, M. Geoghegan, trans., *The New Sociology of Knowledge: The Life and Work of Peter L. Berger*, New Brunswick: Transaction Publishers.）

佐々木毅, 1993,『現代アメリカの保守主義』岩波書店.

清水晋作, 2011,『公共知識人ダニエル・ベル――新保守主義とアメリカ社会学』勁草書房.

Szymanski, A., 1971, "Toward a Radical Sociology," J. D. Colfax & J. L. Roach eds., *Radical Sociology*, New York; London: Basic Books, 93–107.

高城和義, 1992,『パーソンズとアメリカ知識社会』岩波書店.

高橋徹, 1987,『現代アメリカ知識人論――文化社会学のために』新泉社.

上野千鶴子, 1985,『構造主義の冒険』勁草書房.

Vidich, A. J. & S. M. Lyman, 1985, *American Sociology: Worldly Rejections of Religion and Their Directions,* New Haven; London: Yale University Press.

山口節郎, 1982,『社会と意味――メタ社会学的アプローチ』勁草書房.

山嵜哲哉, 1991,「バーガー社会学とその社会批判的位相」西原和久編『現象学的社会学の展開――A・シュッツ継承へ向けて』青土社, 163–211.

（原稿受付　2015.9.19　掲載決定　2017.6.22）

Sociology in P. L. Berger:
A "Science and Ethics" Perspective

IKEDA, Naoki
Kobe University
n.ikeda.kobe@gmail.com

This study aims to examine P. L. Berger's contributions, with a special focus on his work about the meaning of sociology at the meta-level. In the 1960s, when Berger started to develop his theory, the debate on the relationship between sociology and politics was lively. Clearly conscious of this, Berger continued his theoretical work, although he was also concerned about sociology and his religious faith. From a time perspective, the former issue overlapped the latter through the 1970s.

Therefore, this study relocates Berger's theory at the intersection between his consideration on sociology and politics and the ones on sociology and his religious faith. By doing so, it will formulate his sociological thought in terms of "science and ethics" as he put it. This could shed a new light on his theory about sociology and politics, which has been questioned as to whether it embodies conservative ideas. In other words, this study reinterprets Berger's thought within the interrelated frameworks of sociology, politics, and religion.

Thus, this research provides a general view on the outline of his thought configuration. This outline could be the clue to reexamine the concepts within Berger's sociological theory, in particular those of "meaning" and "everyday life," as well as to discuss the traits of American sociology.

Key words: value-freeness, ethics of responsibility, the doctrine of two kingdoms

(Received Sep. 19, 2015 / Accepted Jun. 22, 2017)